

論文 / 著書情報  
Article / Book Information

論題	コロナの時代の語学教育 東工大スペイン語の科目立ち上げとオンライン合同授業の記録
Title	
著者	渡辺暁
Authors	Akira Watanabe
出典	FLS言語文化論集 POLYPHONIA, Vol. 13, , pp. 73-90
発行日	2021, 3

コロナの時代の語学教育  
東工大スペイン語の科目立ち上げとオンライン合同授業の記録

渡辺 暁  
(WATANABE Akira)

FLS 言語文化論集 POLYPHONIA 第13号 抜刷  
東京工業大学 FLS 言語文化研究会  
2021年3月15日発行

## コロナの時代の語学教育

### 東工大スペイン語の科目立ち上げとオンライン合同授業の記録

渡辺 暁

(WATANABE Akira)

#### はじめに

スペイン語は多くの国で話されている、世界で4番目に母語話者が多い言語である。日本の大学教育の場においてもそうした重要性を背景に、伝統的に多くの大学で教えられてきたドイツ語とフランス語に加えて、中国語とともに（もちろん中国語に比べればはるかに小規模であろうが）導入が進んできた。東工大では、スペイン語は2019年度に第三外国語科目として導入され、2020年度より、第二外国語科目として本格的に開講されることになった。

本稿は、2020年度の第3クォーター終了時点（11月末）に執筆された、この科目の誕生と、2020年度におけるオンライン授業の記録である。筆者は昨年度の後半に東工大のスペイン語教員としての採用されることになり、第二外国語の先生方と相談しながら開講の準備を進め、新型コロナによって1ヶ月ほど遅れたものの、5月に無事に開講することができた。本稿執筆の動機は、東工大における科目の立ち上げという得難い経験を振り返り、そして、オンライン授業、しかも複数の教員による合同授業という事例を記録として残し、今後の大学における語学教育に役立てていただくためである。

後で詳しく述べる通り、オンラインでしかも合同で授業をするという形態は全くの偶然から始まったものであったが、回を重ねるごとに少しずつ改良されて、ここに紹介するだけの価値があるものに育っていった、

と担当者としては自負している。もちろんすべての学生さんにとって良いやり方だったかどうかはわからないが、少なくともオンライン授業の特徴をうまく活かしたやり方だったのではないかと考えている。

本稿の構成は以下のとおりである。まず第1節では、オンライン授業における授業実践の記録に先立ち、着任にあたって東工大の初年度の授業の体制を整えて行ったのか、その準備の過程を記述する。続く第2節では、3月に新型コロナウイルスの流行によって、授業のオンライン化が決まった後、どのように合同授業というかたちが作られ、そして整備されて行ったのかを書いておきたい。第3節と第4節では、授業の内容について扱う。第3節で初級の授業の様子を具体例をあげながら紹介し、第4節ではそれに加え、初級の授業における細かい工夫や、中上級の授業の様子について、そしてさらには筆者が非常勤講師として授業を行なった他大学の事例についても紹介していく。

## 1 授業開始まで

スペイン語教員としての採用が内定して初めての大きな仕事は、授業を担当して下さる非常勤講師の先生方を探すことだった。初年度であるから自分一人で回せる程度のコマ数ではないか、と甘いことを考えていた私は、通年で5.5コマ分の非常勤を担当して下さる先生を探してください、との依頼を受けて、目を丸くした。(私の着任が決定する前に、学生さんへの第二外国語選択意向調査によって、複数のクラスの開講が決まっていたのである。)

東工大と同時に、退職によって担当できなくなる前任校の山梨大学の非常勤の仕事も頼まなければならず、気を揉む状況がつづいたが、東京大学名誉教授の木村秀雄先生が早い段階で、非常勤の仕事を引き受けてくださったのに続き、山梨大学で長らく非常勤講師をお願いしていた三浦航太先生(社会学:2021年度より東京大学スペイン語助教)と、東京大学総合文化研究科の川崎義史先生(言語学)のご紹介のおかげで、どちらの大学も担当して下さる方が見つかった。3月で仕事をお辞めに

なった、2019年度の第三外国語としてのスペイン語の授業を担当されていた谷口樹精先生も、後任の方を紹介して下さった。最後に残ったお一人も、1月末に東京大学で行われた研究会で、かねてからこの方なら、と思っていた大学院生の方にお会いしてお声かけし、無理を言ってお引き受けいただくなどして、なんとか授業を担当してくださる先生方が決まったのは2月になってからであった。

授業をご担当くださったのは、木村秀雄先生（人類学・アマゾン／アンデス）、杉守慶太先生（政治学・メキシコ）、佐々木充文先生（言語学・ナワトル語）、永田由紀子先生（社会学・米墨国境）の四人の先生方である。木村先生、杉守先生はベテランだが、佐々木先生と永田先生は、今年度が授業を初めて担当する大学院生であった。

授業計画の策定については、前任校や他に非常勤講師として教えてきた様々な大学のカリキュラムを念頭に、1年半で文法を終えるカリキュラムとなるように、シラバスを書いた。東大や慶應法学部など、1年ですべての文法を教える大学もあるが、これらの大学では週に二時間授業があり（90分授業：東大は2015年の105分授業の導入以降は前期2回、後期1回の授業）、また私の経験上、そのペースでは理解や暗記が追いつかないという学生も多い。したがって東工大では、1年半かけて文法を終え、中級の後半から実際に様々な文章を読んだりする、というペースで、カリキュラムを組んだ。（なおこのプランは結局、実際には大きく変化することになる）また、通常の教科書では最後に出てくる接続法の説明を、過去形より前に教えるという、前任校の中級の授業で実践してきた工夫も取り入れた。

そうしてやっと開講の準備が整った3月、新型コロナウイルスへの対応のため、授業がオンライン化することとなった。Zoomというソフトの存在さえ知らなかった教員が、突然オンラインで授業をすることとなり、大いに不安を抱えながらの出発となった。準備に向けた会議やメールのやりとりの中では、本当にZoomを通して100分の授業ができるのか、授業そのものは30分程度にして課題を課すというのはどうか、教

室でやっていたようなペアワークをやってもらうには、どんな方法があるだろうか、など、授業のやり方についてさまざまな提案が出た。後者についてはブレイクアウトルーム機能を用いる、など、さまざまなやり方があることがわかり、4月30日の非常勤の先生方も含めた説明会（講師：フランス語の三ツ堀広一郎先生）なども経て、授業開始となった。

## 2 合同授業のはじまりと進化

スペイン語の他の先生方とも協議の上、最初の数回の授業は合同で行うこととした。何しろ、私も含めて全教員にとって、東工大での授業もオンライン授業も、初めての経験であり、しかも教員のうちのお二人は、大学院生で今年から授業を担当する方々である。私は前任校に勤務してきたころから、経験を積んでいただくために若い大学院生の方々に授業をお願いすることが多く、そうした場合、場の雰囲気慣れていただくためにも初回は合同で授業を行なう、という試みをしてきた。

そうした経験もあって、そしてまた、そうすることで学生の皆さんにも他の教員の皆さんにも、私の教育方針が伝わるから、という理由で、Zoomでの合同授業という案を思いついた。（なお、火曜1-2限は木村先生、佐々木先生、渡辺、火曜3-4限は木村先生と渡辺、水曜は1-2限・3-4限ともは木村先生、杉守先生、永田先生、渡辺の4名で担当した。）しかしこの合同授業を数回続けるうちに、これは実はオンライン授業に適した素晴らしいやり方なのではないか、と思うようになっていった。その理由を、以下にまとめてみる。

A) 当初の私たち教員が不安に思っていたのは、パソコンを前にして100分の授業を展開できるのか、ということであった。しかしこの点については、4月に東京大学で非常勤講師として授業を行なった際、休憩を適宜入れながら、ではあったが、意外と話せてしまうものだ、ということに気づいた。ただ、逆にこの経験から、教員一人がずっと話していると聞いている学生さんの側が退屈してしまうのではないか、という不安を

持つに至った。

B) クラスによって人数にばらつきがあり、一部のクラスは第三外国語の履修者を受け入れたことで、かなり大きなものになった。(正確な理由は分からないが、大学への立ち入り禁止によって非開講となった科目も多く、時間ができた学生さんが、語学の授業をとってくれたのではないかと、というのが、外国語の先生方の見立てであった。) そのため、当初私は、Zoom の画面におさまるよう、教員プラス学生 24 名の 25 名、という形で人数の割り振りをしていたが、一部の時間帯では、学生数がそれを大幅に上回るケースも出てきてしまった。

C) この Zoom によるオンラインの語学の授業という形態では、教員から学生への一方向の授業の部分に関しては、25 人も 100 人も一緒であり、またグループワークの時間帯には、教員が手分けして指導に回ればいい、という発想から、受講生の数はあまり気にせずに行こう、ということになった。(結果的に、少人数グループに分かれての練習は、最初は試みたものの、参加してくれない学生さんも多かったため途中からはやめてしまった。これはもしかすると私の授業運営力不足で、より学生の皆さんにアクティブに参加してもらうやり方があったのかもしれないし、実際に不満を持っている学生さんもいたようだった。しかし、学期の中盤に行ったアンケートでは、ペアワークが苦手なので、発音練習を自分のペースでできるのはありがたかった、という声も一定数聞かれた。このグループワークをどう取り入れるか、という点については、今後改善の余地があるだろう。)

D) 一人がずっと話すのではなく、各教員が分担して話をし、またお互いにやりとりをすることで、テレビの語学講座のような雰囲気生まれた。一人の教員がずっと話すよりは、学生さんにとって聞きやすい授業になったように思う。(実際、掛け合いが楽しかった、という声も多くい

ただいた。ただし反省点として、教員の間で話が専門的な方へと盛り上がりすぎてしまい、あとから学生さんへの「解説」を行なったとはいえ、彼らにとってついていけない時間ができてしまったことは、自戒の念を込めて記しておきたい。

こうして授業を重ねながら試行錯誤していった結果、出来上がった授業の中での役割分担は、以下のようなものである。

- 1) 授業資料は渡辺が用意し、毎回はじめに趣旨などについて説明する。
- 2) それに続き、佐々木先生・杉守先生・渡辺が基本的な文法事項の解説を行う。
- 3) さらに、佐々木先生・木村先生が、より詳しい文法についての説明（詳しくは後述）。
- 4) 発音練習は永田先生がメインで担当。会話は木村先生を中心に（詳しくは後述）。
- 5) 永田先生が中心となって、授業の内容を適宜チャットに書き込み。

次節ではこの役割分担について詳しく述べつつ、こうした合同授業の中で、どのような内容を扱ってきたか、第1クォーターからの流れを振り返った上で、筆者の記憶に新しい、第3クォーター終盤の話詳しく紹介することで、教員の、少なくとも私自身の目線から、この授業がどのようなものだったのかを述べていきたい。

### 3 授業の内容

#### 3-1 授業の進行

授業は5月の連休中に始まった。教える側も手探りで、成績のことや授業形式についても、学生の皆さんと相談するような形で少しずつ内容に入っていった。教科書については、会話と文章中心の教科書を使いながら、そして、ラテン語の起源に遡ったりしながら詳しく説明をしてい

るうちに、なんと第1クォーターでは発音と名詞、冠詞、形容詞のほかは、動詞を二つ (ser と estar) しかやらないうちに終わってしまった。

確かにかなりのスローペースである。実際、こんなに詳しく文法事項をやらなくていいから、もう少しスペイン語ができるようになりたい、という声も聞かれた。しかしその一方で、外大に行った友人がいるが、外大でもこんなに詳しい解説はされてない、という肯定的な声もあったのには、教員としては大変ありがたい思いがした。また、東大はずっと早いスピードで進んでいると聞き、取り残されている気分だ、と言う声もあったが、それに対しては、東大でも非常勤として授業を担当する教員として、東大はそもそも授業数が倍あるのに加え、あまりのペースの速さについていけない学生もたくさんいますよ、と申し上げた。

第2クォーターは少しスピードを上げ、終了時には、規則動詞に加えて重要な不規則動詞も網羅することができた。学生にとって難関となる目的格の代名詞も、元になっているラテン語の知識なども含めて、かなりきちんと網羅した上でここまでたどり着いたのは、先生方のお力と学生さんたちの理解力のおかげである。その上では、もちろんこうした内容についてこられる能力を持った東工大の学生さんたちが相手とはいえ、かなり充実した授業が展開できたのではないかと考える。

なお、こうした学生の皆さんからの意見については、主に7月はじめに行ったアンケート (回答者 229 名・無記名)、ならびに授業中にチャットで寄せられたコメントを元としている。計画が練られていない、初級者には話が難しすぎる、などの手厳しい意見や、4月に生まれた私の子供の姿や声が入ったりしたことへの抗議の声もあったが、逆に、内容についても子供の存在についても、「掛け合いが面白かった」「様々な角度から文法を学ぶことができた」「周りに気を使わずに発音練習ができてよかった」「スペイン語圏の文化に興味を持った」「いつか旅行に行きたいと思った」「今日も赤ちゃんに癒された」「最近あやすのがうまくなった気がします・育児頑張ってください」などなど、好意的な意見も多く聞かれた。

第3クォーターに入ってから大きな変化は、Google Formによって毎回学生からのフィードバックをもらうようにしたことである（出席を兼ねているので記名式）。また、かなり文法の進みかたは再びゆっくりとなったがそのかわり、教科書第7課のスペインの食生活についての文章を軸に、スペイン語圏の様々な国の食生活や料理について、詳しく扱った。特に、先生方からそれぞれの経験に基づいたお話をしていただいたのは好評であった。また、かなりスローペースであったとはいえ、比較の構文をかなり丁寧に扱ったり、最後に *gustar* 型動詞（スペイン語では「私はリンゴが好き」を、「*Me gusta la manzana.*（＝リンゴは私に好かれている）」と、主語と目的語を入れ替えて表現する）や、再帰動詞（次項で詳述）を教えたりと、当初の目標だった現在形以外の時制にまで入ることはできなかったものの、英語にも日本語にもない、スペイン語をはじめとするロマンス語特有の表現を扱うことができたので、一定の成果はあったと考えている。

次項では授業の進め方の一例として、第3クォーター最後に扱った「再帰動詞」を例として取り上げながら、授業の進め方を再現していきたい。

### 3-2 再帰動詞の事例から

この合同授業の内容についての1番の特徴は、通常文法の説明に加えて、言語に詳しい木村先生と佐々木先生がより詳しい説明をしてくださったことである。木村先生は人類学者、佐々木先生は言語学者で、お二人とも中南米の先住民言語を話せるのと同時に、ラテン語をはじめとするロマンス語全般にも詳しく、それらの言語、特にラテン語について言及しながら、詳しい説明をしてくださった。（木村先生には南米先住民の神話についての御著書があり、佐々木先生は1月に無事、博士論文を提出された。）授業内容の具体例について、ご紹介したい話は多々あるが、本稿執筆直前の授業で扱った「再帰動詞」について、授業の流れを記述することで、この合同授業のようすを再現することを試みる。

再帰動詞については、「自分自身を（に）～する」という形の動詞で、ロマンス語ではよくみられる。例えば名前を名乗るとき、スペイン語だけでなく、イタリア語・フランス語でも、英語に直せば I call myself... という表現を用いる。この再帰動詞について、通常の教科書では、「1 直接再帰」「2 間接再帰」「3 相互用法」「4 再帰動詞としてのみ使われる動詞」「5 強意・転意」「6 受身」という6つの用法が説明され（二宮 2014）、また教科書によってはこれに、「他動詞の自動詞化」といった説明が加わる。

今回の授業では、私がこれに準じて説明を行ったあと、木村先生に説明していただく、という形をとった。私自身、スペイン語を教えるようになるまで一部の用法をよく理解していなかったこともあって、学生の苦労がある程度わかるため、わかりやすい説明を心がけている方だと思っていたが、今回の授業で、自分の理解が不十分であったことを思い知らされた。以下、11月18日の授業での私の説明、木村先生の説明、そしてその次の24日の授業での、これらの説明を受けての佐々木先生の補足の三段階に分けて、今年度の授業での再帰動詞の説明を再現する。

1) 私はいつも、まず日本語で、「スペイン語には起こすという動詞はあるが、一語で「起きる」を表す単語はない。ではどう「起きる」を表現するか？」と学生さんに問いかけ、「自分自身を起こす」という答えを導く、という形で直接再帰の用法を説明する。

この直接再帰で説明できるものは全て説明した後（例えば受身表現：「この家は売りに出ている」をスペイン語では、「Se vende esta casa. = この家は自分自身を売っている」という）、間接再帰を説明する（「手を洗う」をスペイン語では、Me lavo las manos. つまり英語にすると、I wash the hands for me. のような言い方をする：小さい子供の手を洗ってあげるようなイメージと説明）。

そしてさらに、「行く」や「食べる」という動詞にも再帰の形があり、「その場を立ち去ってどこかに行く」「平らげる」（もちろん「自分自身

を食べる」という意味ではな) といった意味になる、というように説明する。(付記すれば、「眠る」にも再帰の形があり、それは眠るに落ちる(=「赤ちゃんが寝付く」「学生が授業中なのに寝てしまう) という意味になる。)

2) 木村先生は続いて、「私は理屈っぽいので」と前置きをされたあと、まず、前述の6つの分類は、文法的な区別と意味的な区別が混じっていると指摘された。つまり文法的区別とは、その再帰代名詞が直接目的か間接目的の二種類であるはずであり、それに相互用法や強意、受身といった、意味上の分類が一緒になっている、という指摘である。例えば同じ相互用法にしても、「私たちは愛し合っている」は直接目的だが、「私たちはお互いに文通する」は間接目的である。

また、強意の用法についての説明は、眼から鱗が落ちるものであった。以下に再現を試みる。

- (A) 「行く」や「眠る」のような動詞は自動詞なので、文法的区別としては間接目的でしかあり得ない。
- (B) 間接目的格であるということは、自分自身に対して、そうした動詞で表される行為が行われる、ということである。
- (C) つまり、自分自身に対して、という側面が強調されるため、「立ち去る」あるいは「眠りにつく」といった意味になるのだ。

この説明に加え、再帰性を持つものとして、代名詞に加えて所有形容詞なども存在するため、ラテン語の文法では再帰「動詞」ではなく、「再帰代名詞」という形で整理されていること、そしてラテン語の再帰を表す所有形容詞 (suus 自分自身の) が、現在のスペイン語の三人称の所有形容詞 (su) のもとになっていることなどのご説明も、教員としてそれでいいのかと思われてしまうかもしれないが、私にとっては目から鱗であった。(なお、ラテン語とスペイン語の三人称の所有形容詞は単複同型

である：つまり英語でいう his/her も their も全て su である。このことも、元が再帰代名詞の所有格ということであれば、説明がつく。）

そして、このように代名詞を中心に考えるというところから、フランス語では再帰動詞は代名動詞という文法用語で呼ばれている、というお話や、フランス語の代名動詞には相互用法はないなど、同じロマンス語という言語グループの中でも、再帰動詞の用法には違いがあるというご指摘も、納得のいくものであった。

3) 次の火曜日の授業では、木村先生と私からの説明に加えて、佐々木先生にもコメントをしていただいた。再帰動詞の一部の用法については、実はまだ定説はなく、今でも議論が続いている、というご指摘のあと、さまざまな用法を「他動性」という概念を用いて、木村先生の説明とはまた別の角度から説明をしてくださった。佐々木先生によれば、再帰動詞を用いることによって、「他動性を下げる」という要素があるのではないかという。つまり、物が売られている、という状況においては、誰がそれを売っているか、よりも、売られているものの方が重要である。そのため、se を用いて、売られているもの以外の影響を下げる、というのである。なお、スペイン語の受身には二種類あり、英語のように be 動詞にあたる動詞+過去分詞で表されるものと、se を使って、「自分自身を～する」のように表現するものもあるが、「殺された」のように行為者が重要になる場合は、英語の受身と同じような形で表現される。そうした場合には、この se を用いた受け身は使われない。（実はスペイン語には「殺す」の再帰形 (matarse) は存在するが、「苦勞して何かをなしとげようと努力する（日本語で言えば「死ぬ気でがんばる」に相当する表現といえるだろうか）」という意味になる。）

また、多くの教科書で「強意・転意（あるいは意味の微妙な変化）」などと説明されている用法については、「コントロールがなくなる」という共通点があることを指摘された。「眠る」の再帰形は「眠りに落ちる」（寝つく・あるいは眠ってしまう）だが、これは自分でコントロールでき

ないものである。また、「食べる」の再帰形は「平らげる」だが、食べてしまったら食べ物がなくなってしまう、「行く」の再帰形は「立ち去る」だが、立ち去ってしまったらその場には何も残らない、といった点で、その動詞によってもたらされた結果について、主語のコントロールがなくなる、という共通点を指摘された。(なお、佐々木先生にはこのテーマに関する代表的研究として、Maldonado (2000) の存在をご教示いただいた。)

この「再帰動詞」の説明を通して、この授業の特徴として二つのことを指摘しておきたい。一つは初級の授業でありながら、文法的にはかなりつつこんだ、学生さんたちもそうだが、教える側としても教えながら疑問を抱くような「なぜ？」に答える授業であったこと、そしてもう一つは、一通りの説明ではなく、競合するようなさまざまな説明を複数の教員が学生に提示するような授業だった、ということである。

このやり方は学生にとってどう届いたのだろうか。もちろん難しすぎた、という面はあるだろうが、少なくとも、文法において論理的に「なぜ」と考える姿勢が理解を促すこと、そして教員の説明が必ずしも「正しい」のかはわからない、ということが、文法という、一般に理論が確立されたと考えられている領域についても言えるのだ、ということを理解してもらえただけでも、大学における学問のあり方を示す一助となったのではないだろうか。

#### 4 その他の工夫

この授業ではその他にも、さまざまな工夫をしてきた。例えば、オーラルコミュニケーションという意味では、音声吹き込みという学期末の課題を課したり、また歌を通してスペイン語のリズム・抑揚を学ぶ、といった話を取り上げるなどの工夫をしてきた。さらには、教科書の普通の会話文についても、人類学がご専門の木村先生が音頭をとり、この会話はどんな状況で、登場人物はどんな人たちで、お互いにとってどんな

関係なのか、たとえばカフェのシーンであれば、そのお客は一見さんか常連さんかを考え、それぞれのシチュエーションでどんな調子になるか考えながら発音しよう、少なくとも自分はそうでないとそもそも読むことができない、という話をしてから、練習をしてくださった。

また、永田夕紀子先生のご尽力についても一言申し上げておきたい。永田先生は発音の練習を中心に担当してくださったが、それに加えて、毎回の授業でチャットでノートをとって学生さんに流して下さり、また第3クォーターの発音課題のお手本を、メキシコのご友人に頼んで用意して下さるなど、多方面でこの授業に貢献してくださった。

また、スペイン語中上級ならびに、大学院生向けのスペイン語文化演習の授業についても、言及しておきたい。今年度はまだ東工大における初級経験者がほとんどいないということもあり、学部生の中上級の受講者はほとんどいなかったため、大学院生向けの授業と合同で行った。(中級の履修者は昨年度のスペイン語(第三外国語)を履修した4年生1名しかいなかったが、卒論で忙しい中、大学院生との合併の授業に最後まで付き合ってくれた。また上級のクラスは当初、スペイン語がすでにかなり堪能なシンガポールからの留学生が受講してくれていたが、研究室の登校日と授業がかぶってしまい、残念ながら第1クォーター終了時にやめてしまわれた。)

この大学院生向けの授業では、文法を全部で10回程度の授業で説明したあと、スペイン語の文章を読む、という試みを始めた。最初は私自身が翻訳をして、学生さんに疑問点を聞いてもらうというやり方をしていたが、途中から、これもまたZoomという環境を生かして、学生さんたちにグループワークで訳を考えてもらう、というやり方に切り替えた。この間、教員は何をしているかという、議論が別の方向にずれている時だけ、チャットあるいは並行して立ち上げているラインで、助け舟とかヒントを出すのである。

これは、我ながら非常にいいアイデアだったと思っている。学生さんたちが自分たちで調べながら読み進めてくれるのを見ていて、しかも

発言を声ではなく Zoom のチャット機能や Line で流すことで、文字情報が残り、また学生のペースを乱さないのが、彼らにとって、教員から介入されているという感覚もあまりない。もちろん、クラスのサイズが小さく、また学生さんが皆優秀な人たちだったからこそ、成立するやり方ではあるが、オンラインの良さを上手く生かした方法であったと思う。なお、チャットの内容について少し書かせて頂くと、授業前半では「この単語の取り方が違うよ」とか、「文法の解釈がそれでいいのかな？」という内容のチャットを流すのだが、徐々に学生さんたちの理解が進んでいくと、「近い」「おいしい」「ちょっと違う」になり、最後には「そうそう」くらいしか書くことがなくなっていった過程は、本当に心地よいものであった。

最後に、著者が非常勤講師として携わった他大学（慶應義塾大学法学部、東京大学、山梨大学）の授業についても、簡単に触れておきたい。なお、学生の反応については、こちらでも秋学期から行っている GoogleForm によるアンケートに依拠している。

慶應義塾大学法学部では二年生向けの授業を担当した。本来は文法をきちんと理解していることを前提に、副題となっている「ラテンアメリカの政治と社会」について文献講読などを行うという趣旨の授業だが、毎年文法の復習を取り入れて好評なので、今年度についても文法の理解をうながすような授業を行なった。春学期開始当初は、オンラインでの授業を隔週とし、授業のない回はそれほど負担にならない課題をやっておいてもらう、という形で、基本的には一年時にやった文法の復習を進めたが、二宮哲先生のコンパクトによくまとまった教科書のおかげもあり、一年時によく理解しないまま過ぎてしまったことが、よくわかったということで好評であった。秋学期にはオンライン授業の回数を増やしたが、様々な時制の解説が特に好評だったようである。

東京大学では一年生の初級の授業を担当した。春学期は週二回授業があり、かなり難解な共通教科書をリレー方式でやっていく、という形で、もう一人の先生と連絡を密に取りながら、授業を進めていった。点数に

よる進学振り分けの制度を今年度も実施するというので、オンラインでの共通テストの手伝いもしたが、学生の皆さんにとってはもちろん、監督する側としてもかなりのプレッシャーを感じながらのテストとなった。30分でできるだけ多くの問題を解く、という形式は、私自身、それが唯一の選択肢だったと考える一方で、多くの学生さんにとって苦い経験となってしまったようだった。(もちろん、「早い段階から試験方法は公開されていたし、実際に勉強した学生が点を取れるという意味でフェアな試験だったと思う」との声もあったが、圧倒的に多く聞かれたのは、時間に追われて焦ってしまい、満足な回答ができなかったという怨嗟の声であった。)

秋学期は週一回の授業を一人で担当しているが、隔週でオンラインと対面の授業を行うというハイブリッド方式のため、オンライン授業の回に文法の説明を進め、学生さんが教室に集まる回は、歌を聞いて歌詞を訳してもらうなど、グループワークを中心に授業を進めた。東工大でも行ったが、優秀な大学院生の方(レバノン思想研究の早川英明さん)がTAについて下さっていたので、その方に少しご研究のお話をさせて頂く、などの時間もとった。当初は前期ご担当された先生とのやり方のギャップに戸惑う学生さんもいたようだったが、授業日程の約4分の3が終わった11月末の時点では、ほとんどの学生の皆さんがこのやり方に納得して下さっているようであった。

最後に、前任校の山梨大学においても、代わりにやってくださる方が見つからず、半年だけ非常勤講師として引き続き勤務した。他の先生方も新人の方が多かったため、昨年度まで使っていた資料を配布し、また授業のスピードを落とすことで、オンライン化に対応した。ここでも初級の授業は三浦航太先生と合同で担当した。

## おわりに

本稿は2020年度のスเปน語の授業について、その4分の3が終了した11月末の時点で振り返ったものである。偶然始まった合同授業とい

う新しい授業のやり方をはじめ、オンラインだからこそのできることの紹介になればと思います、経験を共有したものである。学生の皆さんの中には、厳しい声を寄せる人も多くいたが、それ以上に好意的な声も多かったことから、一定の成果は納めているものと考えているし、また日本のスペイン語教育の歴史（瓜谷 1990）の中でも珍しい、報告に値する事例だったと考えている。

もちろん、授業のやり方に関しては、今後もさまざまな改善が可能であろう。東京大学のスペイン語教育を立ち上げた上田博人先生は、2000年の段階で「文法の意識化」という教育法を提案されているが（上田 2000）、これにならって先生方の協力も得ながら、そして学生の皆さんの声も聞きながら、さまざまな試みを取り入れていきたい。

実は本稿執筆中、山梨大学時代に親しくしていたグアテマラ人の友人、ルイス・アルファロ（Luis Alfaro）氏から連絡をもらった。彼は山梨大学大学院に留学中、スペイン語の TA を長く担当してくれたほか、最後の年は非常勤講師として授業を一コマ担当してくれた。博士号を取得して帰国し、今年から大学で職を得、最初の学期の授業を終えたところだが、学生への接し方など、山梨大学でのスペイン語の授業の経験が非常に役に立った、とのことであった。もともと私は、山梨大が通勤などの面で非常勤の仕事としての条件がよくなかったこともあり、若い先生方に授業を担当してもらい、彼らに教員として経験を積んでもらうことを重視してきたので、ルイスさんのコメントはとても嬉しいものであった。東工大でのこれからの授業も、学生の皆さんは当然のこと、教員も含めた参加者全員にとって学びの場となるような授業を展開していけたらと考えている。

## 追記

第4クォーターの授業では、食文化を中心とした第3クォーターとはかなり方針を変え、スペイン語の様々な動詞の時制（現在完了・未来・命令法・接続法現在・点過去・線過去・過去未来形・接続法過去）を駆

け足で説明した。シラバス作成時の予定では、文法はもう少しゆっくり進める予定だったが、初等文法を一通り初級の授業で扱うという他の言語の方針に合わせるという意味で、そして、初級でスペイン語の履修を終えてしまう学生さんが大半だと考えたため、今年度中に初等文法を一通り終えておいた方がいいと判断した次第である。急なペースではあったが、学生の皆さんは少なくともそれぞれの時制の意味について理解するとともに、仮定法 (subjunctive = 英語以外の、スペイン語やフランス語などの文法用語では、「接続法」と訳される) など、英語の関連する文法事項について、理解を深めてくれたように思う。来年度以降、どのようなペースで授業を進めていくか、そして学生さんにどこまできちんと暗記してもらうのがいいのかについては、現在検討中である。

## 謝辞

東工大における第二外国語としてのスペイン語の授業の開講にご尽力くださった木村秀雄先生・杉守慶太先生・永田夕紀子<sup>先生</sup>・佐々木充文先生、受講生の皆さん、そしてTAとして授業をサポートしてくださった孫静怡さん、徐一文さん、朱浄雨さん、泉沙織さんに、厚くお礼申し上げます。また、着任と新科目開講に際してアドバイスをくださった、東工大第二外国語セクションの先生方そして事務の皆様、そして、山梨大学からの移籍をスムーズなものにくださった、山梨大学教務課の小林静香さん、中山麻衣子さん、非常勤講師の三浦航太先生、星川真樹先生、大橋麻里子先生、そして山梨大の非常勤の仕事を新たに引き受けてくださった河村泰雄先生、長塚織人先生にも、この場を借りて御礼申し上げます。

## 参考文献

### 〈引用文献〉

上田 博人 2000 「第二外国語としてのスペイン語教育—文法の意識化

と「授業レポート」『スペイン語学研究』(15), 83-98. (lecture.ecc.u-tokyo.ac.jp > kyoiku > ishikika > ishikika より入手)

瓜谷良平 1990「日本におけるスペイン語の学習、教育、研究の歴史」『イスパニカ』34.

Maldonado, Ricardo. 2000. "Conceptual distance and transitivity increase in Spanish reflexives," in Zygmunt Frajzyngier and Traci Walker (eds.), *Reflexives: Forms and Functions*, pp. 153–185. Amsterdam: John Benjamins.

#### 〈使用した教科書と推薦した参考書〉

テジヨ・マロト 1982『スペイン語 12 課』白水社.

二宮哲 2014『スペイン語文法の要点』朝日出版社.

上田博人 2011『スペイン語文法ハンドブック』研究社.

西村君代 2014『中級スペイン語——読み解く文法』白水社.

#### 〈著者によるこれまでのスペイン語教育に関する文章〉

渡辺 暁 2012「地域研究者として教える第二外国語—ラテンアメリカ研究とスペイン語教育のあいだ—」『青山スタンダード論集』第7号、107-122。

——— 2017「教養教育としての第二外国語教育—東京大学 2015 年度秋学期 (A セメスター) の授業の記録から—」『高等教育と国際化——山梨大学教育国際化推進機構紀要年報』第3号、28-32。

——— 2018「予期せぬ科目誕生の記録—山梨大学スペイン語カリキュラムの創設過程 (2012-18) を振り返って—」『高等教育と国際化——山梨大学教育国際化推進機構紀要年報』第4号、52-58。

Watanabe, Akira. 2014. "Throw away the Textbook and Get a Paperback Instead: Reading García Márquez Short Stories and Sandra Cisneros's *La casa en Mango Street* in Spanish with Limited Vocabulary and Grammatical Knowledge," *Journal of Literature in Language Teaching*, 3 (1), 8-19.